

文化往来

ポ 戯曲集」がこのほど、日本で初めて刊行された。大きな空白のようなものを埋めたかった」と出版の動機を語る。

発行元はイタリア関連の出版やイベントなどを手がける福岡市のイタリア演劇に詳しい共同翻訳者を見つけてるのに時間がかかり、刊行には10年を要した。スリス館

20世紀のイタリア演劇界をリードした劇作家、エドゥアルド・デ・ファイリッポ(1900-84年)。リのごそ泥の青年が主人公の第1巻は「ファイリッポの個性はセリフに最も表れる。笑っているのに泣いているのにおかし

イタリアのファイリッポ戯曲集、国内で初刊行

る人間のありのままの姿を喜怒哀楽の感情豊かに描き、映画監督フエデリコ・フェリトニやオートソン・ウエルズら多くの物語の作り手に影響を与えた。その戯曲を集めた「エドゥアルド・デ・ファイリッポ

店番のための人生

私は18歳から和裁を習い始めた。いつか独立しようと思つて。反抗の手段だったはずのものが店を救う。1960年代半ばから上川口屋の経営が傾き始めた。子供が駄菓子

の条件を付けたので進まなかつた。結婚時、義母は婿養子を決めたものの、「店を毎日手伝うこと」を私に約束させた。その誓いを私は守つた。新居を構えた横浜市から毎日、バスと電車を乗り継いで通つた。早朝に出て、帰宅は深夜。休みは土砂降りの雨の日だけ。辛かつた。産んだ子

黒書院の

六兵衛

浅田 次郎
宇野 信哉 画

庭に面していない御用部屋は、昼日なかというにほの暗く、欄間からこぼれ落ちてくるわずかな光だけが手許の頼みであった。

西の丸御殿はがらんどうであるはずなのに、どうして勝安房守はこんな座敷に詰めているのであろう。文机の脇には行灯がともっている。

「幕府が倒れねば、の話でござるな」
単人の言葉に、安房守は然りと肯いた。

「あんた、頭がいいな。江戸定府の徒組頭にしておくのはもったいない。俺が尾張大納言様なら、ただちに御側用人なり勘定方なりに引き立てるところだ」

的矢六兵衛という闇に、一条の光明が射したように思えた。

おととしの暮に、あやつは大金をはたいて的矢六兵衛となった。それまでの人生を捨て、家も姓名も御祿も、的矢六兵衛にまつわるすべてを買い取ったのである。